

一月七日（土）

沙綾が物珍しそうに、居住スペースのリビングやダイニングを眺めている。私は私で、そこに娘がいる光景を新鮮な気持ちで見ている。居間や吐き出し窓の向こうの景色を確かめると、いつも通りの手付きで使い込まれた椅子に腰を下ろした。隣に置いた紙袋を覗き込み、カバのぬいぐるみを取り出した。

「カバの何がそんなにいいのかしら」

「ただのカバじゃなくて、コビトカバよ、コビトカバ」

カバのぬいぐるみを抱えて、キョロキョロしながら辺りをウロつく。何かを思いついたように階段の下へ降りようとするから、「サロンスペースにカバはダメよ」と呼び止めた。

「あの空間に置いていいのは、ホワイトタイガーだけ」

沙綾は不満げな声を漏らすけど、私は首を振って改めて否定する。そこで面倒臭くなったのか、隣の和室へぬいぐるみを置いた。

「ニフレルのホワイトタイガーだけど、ファミリールンドのホワイトタイガー、だっけ？」

「そう。宝塚の空気をちよつとだけ、ね」

ニフレルで買ったぬいぐるみに宝塚の要素は微塵もないし、ファミリールンドも閉園してから永いけど、サロンのイメージを少しでも補強してくれたらと思っ
て置いている。リラクゼーションに丸いコビトカバも悪くないけど、ハイソなイメージは保ちたい。

テーブルに戻ってきた沙綾にコーヒーを出す。沙綾はスマホの画面を見たま
ま椅子に座る。

「一輝、もうすぐだっつて」

沙綾は顔を上げ、コーヒーを啜った。時計に目をやると、もうそろそろ一七時半。お店の予約は一時間後だから、流石に間に合うだろう。沙綾はコーヒーを飲
みながら、インスタでも見ているらしい。

「あっちの部屋はどう？」

スマホの画面をスリープにして、テーブルに置いた。

「まだまだ、なぐんにも」

「全部持つてきちゃったけど、良かった？」

沙綾は頷きながら、「今のところは」と言い添えた。スマホを手に取り、写真を見せてくれた。少ないなりに家具はあるものの、部屋の広さを持って余しているといった感じで、部屋に馴染んでいる、納まりがいいという雰囲気ではない。

「彼は才能豊かなデザイナーさん、じゃなかったっけ？」

「外側と中の空間づくり、はね」

「お友達のインテリアコーディネーターさん、紹介しようか？」

私が返したスマホを受け取りながら、沙綾は首を振った。

「春までに決着つかなかったら、その時はお願いするかも」

沙綾のスマホに、新しく通知が届いた。「一輝、駅に着いたって」。彼女はスマホを仕舞い、そそくさとコートに袖を通し始める。私は汚れのないシンクに、二脚のコーヒークップを置き、支度が済んだ沙綾に、「先に行つてあげて」と声をかけた。彼女はなんの遠慮もなく、自分の鞆を肩にかけて階段を降りていく。

戸締りを確かめ、空調を切つて、灯りを消す。いつもの家、いつもの暗がり但至少だけ広く思えた。和室のコビトカバの頭を撫でて、玄関へ。靴を履いて待っている沙綾と共に家を出て、ちよつぱり賑やかな土曜日の住宅街を、地元駅の方へ向かつて歩き始めた。

初出 令和三年二月二四日 PIXIVにて公開